

長谷田洋著「Best Practice Company ベストプラクティス企業 絶えまない進化と活力の創造」
日科技連 2003年9月12日刊を読む

ベストプラクティス企業とは

- 1 (1) 1980年代、日本経済は右肩上がりの成長を遂げ、日本経済は世界の手本となった。
 - (2) しかし、1990年代前半のバブル経済の崩壊後、低迷を続け、いま、日本企業の経営者は自信を失っている。
 - (3) 今後、日本企業が復活し、持続的成長を遂げるにはどのようなことが経営に求められ、それをどのように実施したらよいのであろうか。
 - (4) また、かつて日本的経営を支え、世界的に競争力を有したマネジメント技術であるTQM(総合的品質経営)は、いまや米国のシックスシグマやマルコムボルドリッジ賞に代表される経営品質の評価など新しいマネジメント技術に追い上げられている。
 - (5) 一方、かつてTQMにより世界 No.1 の高品質を誇った製造業ではリストラ等のために品質向上の努力を怠り、リコールや品質事故が急増している。TQMにも変革が必要になったのである。
- 2 (1) こうした中で日本企業再生の方策を探るために筆者の研究が1999年より始まった。
 - (2) 多くの企業の事例を研究する過程で日本企業にも経営環境が悪化した1990年代後半に、史上最高の売上高や利益を得て、その後も着実に発展している企業があることを発見した。
 - (3) しかもそれらの企業は世界第1位の市場シェアを誇り、世界市場を席卷している強力な商品、事業を有することもわかった。
 - (4) このような企業こそ現代のエクセレントカンパニーといえる。
 - (5) GEやIBMに代表される米国のエクセレントカンパニーの優れた経営方式を学ぶことはもちろん重要であるが、国内外の経営風土の違いを考慮すると、いたずらに海外の経営手法を直輸入するのはやや危険である。

(6) むしろ経営基盤が類似している上述の日本の新たなエクセレントカンパニーの優れた経営方式を分析し、その背後にある成功要因あるいは経営手法や業務方法（これをベストプラクティスと呼ぶ）を学ぶことは、他の日本企業にとって非常に参考になるに違いない。

[コメント]

ベストプラクティスのベンチマーキングの手法を身に付けるのには絶好のテキスト。サービス産業の生産性向上に不可欠なベストプラクティスのベンチマーキングの具体的手法は、この長谷田先生のテキストで身につけたい。

- 2010年2月19日 林明夫記 -